

第34回広瀬川創生プラン策定推進協議会 議事録

- 日 時：平成 29 年 10 月 24 日（火曜日） 10：00～12：00
- 場 所：仙台市役所本庁舎 2 階 第 5 委員会室
- 出席委員：宮原 育子 会長、小祝 慶紀 会長代理、日下 晋 委員、工藤 秀也 委員、後藤 淳 委員、菅井 一男 委員、杉山 ふじ子 委員、西大立目 祥子 委員、長谷川 裕寿 委員、廣田 芽衣子 委員、深松 努 委員
- 欠席委員：阿部 由起子 委員、猿田 誠 委員、高橋 勝利 委員、多田 千佳 委員
- 事務局：仙台市建設局百年の杜推進部河川課
- 議 題：平成 29 年度重点事業の進捗・評価について
 - ・平成 29 年度重点事業一覧
 - <報告・評価>
 - ・重点事業 2 広瀬川で遊ぼう
 - ・重点事業 2 作並かっぱ祭り
 - <中間報告>
 - ・重点事業 1 広瀬川 1 万人プロジェクト
 - ・重点事業 3 アイラブ広瀬川プロジェクト
 - ・重点事業 4 広瀬川市民会議の運営体制の強化検討

■ 要 旨：

- 平成 29 年度の重点事業のうち、「広瀬川で遊ぼう」と「作並かっぱ祭り」について、いずれも次年度も継続することが望ましいという評価を受けた。
- 広瀬川創生プランに係る事業を推進する上で、「人材の確保」と「活動費用の確保」が課題であることが、再認識された。
- 「人材の確保」の視点から、より多くの企業から協力を得るために、企業にとってインセンティブになるような仕組みが必要との提言がなされた。
(例：感謝状の贈呈、市ホームページへの掲載等)
- 「人材の確保」の視点から、新たな人材の掘り起こし先として、留学生や研究者など、これまで着目できていなかった人たちへの働きかけを提案された。
- 「活動費用の確保」の視点から、クラウドファンディング等の活用等、広く一般市民全体に協力を呼びかける手法が提案された。

■ 議事詳細：

1. 開会

○司会（菅野課長）

ただ今より「第34回広瀬川創生プラン策定推進協議会」を開会する。

まず、会に先立ち、人事異動等により新しく委員をお願いしている方を紹介する。財団法人 仙台観光国際協会 常務理事兼事務局長兼総務企画部長 日下 晋 様、株式会社JTB東北 本社営業部 地域交流事業課 廣田 芽衣子 様、また、本日はご欠席であられるが、東北電力株式会社宮城支店 企画管理部門(広報・地域交流)主査 阿部 由起子 様、国土交通省東北地方整備局 仙台河川国道事務所調査第一課長 猿田 誠 様 の計4名の方に新たに委員を委嘱している。よろしく願います。

そのほか、高橋委員、多田委員については、所用により欠席との連絡をいただいている。

次に、仙台市の職員にも人事異動等により変更となった職員がいるので紹介させていただく。建設局次長の佐野 直樹、百年の杜推進課長の 高橋 英樹である。なお、その他の仙台市の出席者については、資料の「席次表」をご覧ください。

2. ご挨拶

○司会（菅野課長）

それでは、次第にもとづき、宮原会長よりご挨拶をいただきたい。

○宮原会長

昨日、県内にも大きな被害を及ぼした台風21号への対応等、大変お忙しい中お集まりいただき感謝申し上げます。今年度も本プランは様々な事業を実施しているが、委員の皆様にご報告および相談させていただきたい事項が、それぞれの事業について出てきているため、本日は活発な議論をお願いしたい。

○司会（菅野課長）

続いて、仙台市側を代表して、建設局長の村上よりご挨拶を申し上げます。

○村上建設局長

本日はご多忙の中お集まりいただき、感謝申し上げます。前回の開催から約半年が経過したが、この間、本プランに基づき、例年恒例となったイベント等も含めて様々な事業が実施された。いずれの事業においても、大変多くの方に積極的に活動して頂き、御礼申し上げます。中でも今年は、夏に開催された「作並かつば祭り」にお邪魔させて頂いた。大変暑い時期の開催ではあったが、家族連れを中心に多くの人々が楽しんでいる姿があった一方で、長谷川委員が所属されているニッカウキスキー 仙台工場様の社員の方をはじめ、多くの実行委員会スタッフが大変なご苦勞をなさっている姿を、つぶさに拝見してきた次第である。このような素晴らしいイベントが継続して開催されることが、広瀬川のブランド力を高め、仙台市民の共有財産として将来に引き継いでいかなければならないという、認識につながるものと考えている。委員の皆様におかれましては、ぜひとも広く忌憚のないご意見を頂戴し、活発なご議論となりますことをお願い申し上げ、簡単ではあるが、私からのご挨拶とさせていただきます。

3. 議事

○司会（菅野課長）

本日は全15名の委員のうち、11名の方に出席いただいております、過半数を達しているため、本会は成立しています。以降の議事の進行については宮原会長にお願いします。

○宮原会長

まず、今回の議事録署名は五十音順で西大立目委員にお願いしたいがいかがか。

＝一同了承＝

○宮原会長

それでは、それぞれの重点事業の報告を受ける前に、初めて参加される委員の方もいらっしゃる上に、前回の協議会から期間が空いたこともあるため、まずは今年度の重点事業について、前回の協議会の振り返りも兼ねて、事務局から説明をお願いしたい。

○事務局（杉井 広瀬川創生室長）

資料1～2に沿って、各重点事業の設定時の視点や概要について説明。

○宮原会長

本協議会には、数多くある事業の中で特に重要と認められるものについては、重点事業として設定し、負担金等の支援を行いつつ、成果について報告を受け検証・評価を行うというタスクがある。広瀬川をフィールドとして、どのように交流の機会を増やしていくのか、という視点も大きなテーマであるため、今回から新たに委員になられた観光関係の方々をはじめ、様々な意見をお願いしたい。

それでは続いて、報告と評価を行う重点事業2について、事務局から説明をお願いしたい。

○事務局（杉井 広瀬川創生室長）

資料3,4および参考資料1に沿って「広瀬川で遊ぼう」について説明。

資料5,6および参考資料2に沿って「作並かつば祭り」について説明。

○宮原会長

今の事務局からの報告・説明に対して何か意見はあるか。

○菅井委員

今年も広瀬川で遊ぼうの実行委員長を務めさせていただいた。今年で12回目となるイベントだが、報告にもあるように、今年は天気にも恵まれ、8,500人という過去最高の来場があった。それだけでなく、来ていただいた人たちに、大変喜んでいただけたのではないかという手ごたえも感じているところである。

一方で、我々スタッフ側としては、ますます大変になってきていることも実情であるが、1万人プロジェクトと連携して、当日スタッフ派遣や協賛金といった支援をいただけたのは、非常に助かった。これだけの来場があると、その分スタッフも多く必要となるため、学生ボランティアの協力は年々増えてきてはいるものの、主導的に様々な業務を引っ張っていただける人材の確保が課題となっている。その他にも、トイレが足りないといった現実的な課題も見えてきている。事務局からの説明にもあったが、来年度も継続すべきということについては同じ考えであるが、個人的な話になってしまい恐縮だが、来年度は自分の所属における立場も変わるため、社員の動員をかけたり、会社の備品等を提供したりといった、これまでのような関わり方は難しくなっている。そのため、実行委員会の層を厚くす

る、もしくは事務局機能をもっと強化する、といった方向で考えていかないと、何かと困難になるだろうという感想である。中心となっている広瀬川ボートクラブのメンバーの高齢化という課題もあるが、せっかく素晴らしいロケーションの中で開催してきているので、今後も継続して開催して、もっと多くの市民の方に楽しんでいただけるように考えていきたい。

人の問題に加えて、やはり何をやるにしても資金面の問題も出てくる。「人とカネ」の確保については、ぜひとも委員の皆様にお知恵を賜りながら検討していきたいと思っている。

また、人気の高いイベント、「ダンボールで遊ぼう」や「乗馬体験」はいずれも人手がかかることもあり、1日のみの開催となっている。これらのイベントがない日に来場した人が残念がっているといった報告も聞いているし、もし3日間通して実施できれば、もっと盛況になるのではないかと考えている。

加えて、近年はリピーターが増えてきており、「今年も楽しみにしていた」といった声が聞かれると、こちらとしてもやりがいを感じる事ができた。

新たな展開として、今年度の開催前に、小祝会長代理(日本ブーメラン協会所属)にブーメランを使ったブースを出せないかご相談に伺ったが、風の影響を受けやすいことと、安全面等から実現しなかった。その代わりとして提供いただいた、紙製のブーメランの製作・体験コーナーは、大きな反響があったことから、来年度はもっと発展した形で、ブーメランを取り入れられないかと考えている。

また、せんだいデベロップメントコミッションという会社から、9月に同じ宮沢橋で「広瀬川outdoor Fes」という体験型イベントを開催したいということで相談を受けた。残念ながら台風の影響で開催には至らなかったが、「広瀬川で遊ぼう 秋ver.」というサブタイトルもつけていただけたし、春だけでなく秋も宮沢橋でイベントが開催できれば、夏の灯ろう流しや花火大会といったイベントと合わせて、1年を通して楽しめる環境ができるため、そういった可能性についても、委員の皆様のお知恵をいただきながら検討していければと思っている。

○宮原会長

菅井委員より、広瀬川で遊ぼうが抱えている、運営側の人手不足や資金面の課題もある中で、企画を整えながら継続していくためにはどうしたらよいか、という視点で、菅井委員の考えも含めてご意見をいただいた。この件に関して、委員のみなさまから何か意見はないか。

○工藤委員

昔は、子供にとっては川は絶好の遊び場であったが、近年は危険な場所というような認識の方が強く、川で自由に遊ぶ機会は少なくなってしまった。そのため、広瀬川で遊ぼうや作並かつぱ祭りのようなイベントの需要は非常に大きく、特に市内中心部に住んでいる人々にとっては、貴重なイベントとなっていると思われる。このようなイベントが継続していくためには、関わる人々の高齢化という課題もあるが、安全な川遊びを指導できるインストラクターの養成が不可欠であると考え。子どもだけでなく、親の世代も川遊びに縁がなくなっている現代において、協議会としてもこのことについて検討していくべきではないか。

○宮原会長

作並かつぱ祭りの実情も踏まえて、ご提案いただいたが、同じく作並かつぱ祭りの運営にも携わった長谷川委員から意見をいただきたい。

○長谷川委員

2年前から事前申込・抽選制としている。落選してしまう人も大勢いることも確かだが、当選して参加した方々の満足度は非常に高くなっていることは間違いないと思われる。また運営側としても、人数

が把握できるため、システマティックに動けるため、安全面の確保という視点からも非常に大きいメリットがあると考えている。一方で、当日の会場で従事するスタッフは若手も多いものの、場外駐車場の整備のための草刈りや、当日の駐車場周辺の交通整理・誘導等に携わっていただいている方たちは年々高齢化してきていて、そういったいわゆる「裏方」というか、見えない部分で支えていただいている人材の確保といったことは、大きな課題になっているのが現状である。

○宮原会長

作並かつぱ祭りは、人数制限を行うことで中身の質をあげていくことに成功されたということであるが、広瀬川で遊ぼうは、趣旨や開催場所等の兼ね合いから人数制限は現実的ではなく、来年度はさらに多くの来場が予想される。

○工藤委員

広瀬川1万人プロジェクトと連携して、企業のCSR活動の実績となる活動の対象に、広瀬川で遊ぼうと作並かつぱ祭りをいれていただいたのは非常に大きい成果であった。当日だけでなく、来年度は準備段階から協力をお願いできればと考えている。

○菅井委員

企業からの支援という意味では、広瀬川1万人プロジェクト以外にも、数社から協賛金を提供いただいているが、これらの企業に対してメリットとなるようなものを提供できていないのが現状である。企業がメリットと感ぜられるような仕組みをつくれれば、協賛金だけでなく人材の確保にもつながると思うが、どのような方法が考えられるか、委員の皆様にご意見を頂ければと思っている。

○深松委員

広瀬川1万人プロジェクトの澱橋会場を担当している。今回、SMBC(三井住友銀行)グループにお声掛けしたところ、多くのグループ関係者が参加してくれた。去年は同様にみずほ銀行グループにお声掛けしたが、そちらも同様だった。このように、大手企業は、企業としてCSRに取り組みたいが、どこでやればよいかかわからない、というのが現状なのだと思う。そういった企業に対するメリットとしては、大手企業の社員に多い通勤族の人が広瀬川を訪れるきっかけづくりになり得るという面もあるが、会社としてメリットと感ぜられるためには、例えば「仙台支店としてこういうCSR活動に取り組み、仙台市から感謝状をもらったとか、仙台市のホームページに掲載された」といった、本社に対してアピールできる仕組みが、費用も大きくかからずに実行可能なところから考えても、非常に有効だと考える。企業にとっては、そういった社会貢献活動に取り組んでいるという事実が、広く一般的に周知されるのが非常にありがたく感ぜるものであるはずである。このような仕組みができれば、人材の確保という面でも、もっといい形になるのではないかと。

○宮原会長

非常に重要な視点であると思う。こういった仕組みづくりは、広瀬川1万人プロジェクトや広瀬川市民会議などの市民団体レベルでは構築できないものであり、来年度以降に向けて、仙台市として早急に整備していただくように検討をお願いしたい。

○後藤委員

広瀬川で遊ぼうや広瀬川1万人プロジェクトに対していろいろな企業の協力が得られたのは、それぞれ菅井委員や深松委員の独自の人的ネットワークによるところもあると思われるが、別の視点として、企業サイドだけでなく市民サイドにも協力をお願いしていくということも必要になってくると考える。費用面で市民に協力をお願いするとなれば、現在盛んに行われているクラウドファンディングを活用

するというのも選択肢の一つである。その場合、費用を拠出いただいた人に対しては、例えば広瀬川の砂で作った陶器をプレゼントするなど、市民の方々が日ごろから広瀬川を身近に考えられるようになることから始めて、その中から将来的な担い手となる人が出てくるような仕組みづくりができれば理想的である。

○日下委員

クラウドファンディングという話が出たが、例えば市内中心部の商店街で実施するような規模の場合でも数十万円～百万円強の費用を調達可能であり、全国展開するような規模だと、さらにもうひとケタ大きい金額も調達可能である。しかし、クラウドファンディングでは、趣旨に賛同してくださった方に対する御礼の品というものが必須となる。例えばアニメ関係やスポーツ関係のような、コアなファンがいる事業であれば、グッズを利用することで比較的大きな金額を集めることも可能だが、広瀬川という視点で考えた時に、御礼の品としてふさわしいものが、現時点では思いつくことができない。何か広瀬川に関連した魅力的なものを御礼の品として活用できれば、非常に有効な手段になると考える。

○宮原会長

広瀬川は仙台市のシンボルであり、観光や留学生との交流の場と野なり得ると思うが、仙台観光国際協会として、人的なことも含めて、何か協力できる可能性はあるか。

○日下委員

内容によりけりだと思う。今回の報告書等を拝見させていただき、対応できる形について考えたい。

○廣田委員

海外から観光客を誘致するような業務に携わっているが、そういった方たちの交流の場として、今報告にあったようなイベントを活用しても面白いのでは、と感じた。また、仙台には多くの大学があるが、留学生も多数在籍していて、そういった人たちに仙台を知ってもらうきっかけとして、ボランティアに協力してもらおう、ということも有効ではないかと考える。

○後藤委員

広瀬川に関わる歴史的な部分を掘り起こして、それらを歩いて回ることができるようなモデル散策ルートをつくるということも、実現しやすい取り組みであると考えます。

○深松委員

自分の娘がドイツからきていた留学生を色んな広瀬川のイベントに連れて行ったところ、すごく興味深げに参加していたと聞いていた。留学生用の掲示板などにイベントのお知らせを掲載することができれば、留学生にとっては交通手段という課題はありつつも、集団での参加やボランティア協力などにつながるのではないかと考える。

○宮原会長

いろいろな主体にはたらきかけて、掘り起こしをしていくということも大事である。

ここまで様々な意見をいただいたが、重点事業2の評価については、事務局提案の通りでよい。

＝一同了承＝

○宮原会長

それでは、その他特に意見がなければ、重点事業1、3、4の中間報告にうつりたい。まずは、事務局から当該項目について説明をお願いしたい。

○事務局（杉井 広瀬川創生室長）

資料 7 に沿って「広瀬川 1 万人プロジェクト」について説明。
資料 8,9 に沿って「アイラブ広瀬川プロジェクト」について説明。
資料 10 に沿って「広瀬川市民会議の運営体制の強化検討」について説明。

○宮原会長

今の事務局からの説明について、質問等はあるか。

○杉山委員

アイラブ広瀬川の純米吟醸酒「清流広瀬川」の企画についてであるが、今年は誕生してから10周年ということで、販売店や蔵元さんと協力して試飲会を実施したこともあり、昨年の2倍の売り上げがあったと聞いている。これをいい機会としてとらえて、販売店のある荒町出身の市民会議会員の人や商店街の関係者と相談して、地元のいろいろな名産品と「清流広瀬川」を組み合わせた、製造体験等のイベントを、広瀬川1万人プロジェクトの広瀬川学校などの枠組みを使って実施できないか検討したいと考えている。

○工藤委員

少し補足させていただくと、市民病院が移転したり、地下鉄東西線ができたことでバス路線が廃止されたりと、現在の荒町商店街は活気がなくなってきているというのが現状である。そういった中で、報告にもあった試飲会を実施したときに、何か連携して商店街を盛り上げるようなことはできないか、と検討している段階である。

○宮原会長

広瀬川1万人プロジェクトについて、今回もたくさんの人に参加頂いたという報告であるが、澱橋会場を担当した深松委員、何か意見はあるか。

○深松委員

今年も多くの人に参加頂いたがゴミが少なく、ゴミ拾いというよりは、ゆっくりと風景を眺めてくださいといったような状況になっている。ゴミが少なくなっているということは非常に良いことだが、せっかく集まってくださっている人たちに対して、何か別の楽しんでいただけるような企画を用意することも必要になってきているのかもしれないと感じている。より多くの人に参加してもらいたいが、そうすると拾うゴミがなくなるというジレンマもあるが、全国的にみても、こういう川は珍しいと思うので、仙台の魅力の一つとして発信し続けていきたいと考えている。

○長谷川委員

作並会場も、始めた当初はすごくゴミが多かったが、最近は非常に少なくなっているということが実感できている。しかし、人が立ち入ることのできないような場所にはまだまだたくさんゴミがあるので、それをどのように対処するかということは、課題である。

○杉山委員

大橋右岸会場を担当した。大橋も同じようにゴミが少なかったが、その分少し余裕もできたこともあり、参加してくれた人たちと一緒に広瀬川沿いを歩きながら、周辺の地域にまつわる歴史等を紹介したところ、すごく喜んでいただけたことが印象的であった。

○宮原会長

事業ごとに様々なテーマがあるので、メインのテーマ以外にはどうしても気づきにくいものである。しかし、広瀬川という共通のフィールドを使っているのだから、テーマの異なる事業もどんどん交わらせ

ていくことも、有益であると考えているが、いかがか。

○西大立目委員

同感である。重点事業4の中間報告のなかで、環境局と連携した企画が紹介されているが、どうしても縦割りのイメージが強い役所でも、こういう企画をどんどん増やしていくと、新しい変化が出ていくのではないかと感じた。川の清掃といっても、ただ拾っているのではなくて、生活の中で風景を眺めているうちに、ゴミがあることに違和感を覚えて清掃活動をする、という一連の流れがあるはずなので、様々な事業をつなげていくことは大切であると考えている。

○宮原会長

ジャズフェスの広瀬川への誘致ということに関しては、事務局からの調査結果を見るに、簡単ではないということがわかった。実現するためには、誘致する側がスタッフや当日の運営も担う必要があるということだが、いかがか。

○日下委員

仙台観光国際協会としても、ジャズフェスに対しては、いろいろな形で協力させていただいているが、今回の誘致という課題に関しては、単純にボランティアを集めればよいという話でもなく、先頭に立って実行していく人材を確保した上で、さらにそれをサポートするボランティアが必要となってくるので、実現までにはかなりの時間を要するのでは、という印象である。

○宮原会長

その他、何か委員の方から意見はあるか。

○西大立目委員

売れ行きが好調な「純米吟醸酒 清流広瀬川」について、仕込みの量を増やすことはできないか。

○杉山委員

販売する店に限られているという問題があるが、蔵元に相談してみようと思う。

○西大立目委員

以前、荒町で地域づくりのフォーラムを実施したことがある。通常、このようなフォーラム等のあとには交流会が開かれることが多いが、そのときに「広瀬川晩酌セット」のような形で、「清流広瀬川」やニッカウキスキーといった広瀬川に関連の深いお酒と、仙台名産の笹かまぼこ等をセットで販売することが企画できれば、地域活性化につながるのではないか。

また、広瀬川と別の場所で、地域に根付いた形の「市」を主催しているのだが、そこにある学生から、卒論のテーマとして取り上げたいという申し出があり、調査・研究をされている。広瀬川にも卒論のテーマとなりうるものはたくさんあるはずで、一人や二人でも、卒論のテーマとして取り上げてくれる学生さんが現れれば、それは単純なボランティア活動に参加してその時間だけで終わってしまうのとは違ってくるはずである。宮原会長や小祝会長代理にもぜひ協力頂いて、広瀬川を学生を育てるための「学校」と見立てたような、新しい関わり方が誕生すれば、素晴らしいことだなと感じる。

○宮原会長

ジオパークの活動をしているが、ジオパーク自身が補助金を出して、研究活動や論文の執筆を依頼するという、研究者にとってもジオパーク側にとってもメリットが大きいスキームがある。広瀬川は、自然や環境だけでなく、歴史や地域社会との関わりなど、題材は豊富であるから、同様のしくみができれば、興味を持ってくれる研究者や学生が増える可能性は考えられる。

では、これまで様々な事業について議論してきたが、小祝会長代理に総括をいただきたい。

